
とある覚悟の魔術結社(マジックキャバル)

赤川島起

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある覚悟の魔術結社マジックキャバル

【ZPDF】

Z3335BA

【作者名】

赤川島起

【あらすじ】

某月某日。上条当麻達は平和な日々を過ぐしていた。

そんな中、幻想殺し（イマジンブレイカー）を狙つたある組織が表舞台へと出てきた。

平和な日常から、上条当麻はまたもや戦いの渦に巻き込まれる。彼らの目的は一体……。

科学と魔術が交わるとき、物語は始まる。

プロローグ 組織はゆづくと動を止め stand-up – silent

8月末 某日 英国

二人の男は向かい合っていた、真剣で重々しくて覚悟を決めた表情で。

「本当にいいのか？」

「構わない。」

その言葉は、迫力が……覚悟があった。そしてなおかつ、強い言葉だった。

「お前が言うならいいが、責任は取らないぞ。」

「ああ、覚悟の上だ。だが嫌な役をやらせたな。」

「いいさ、目的を果たすためなら。……じゃあ、いくぞ。」

言葉の後一拍置き、覚悟を決めた男に触れる。

そして、触れられた男が光りだす。

光っている男は苦しんでいた。光そのものが苦しめているよう。光を与えた男は、吹き飛ばされる。その光が、まるで暴風のようだ。

「……ぐはあ。つか……はあ……はあ……。」
男は吐血、いや、喀血していた。あまり大丈夫とは言えない出血量だ。

……だが、男の表情には、……笑みが浮かんでいた。

「くつ……、言わんこいつちやない……と言いたいところだが……、成功だ。しかし、……すさまじいな。」

「……いや、お前もよくやつてくれたな。短い期間で、もう魔術を使いこなしている。科学者だというのに。」

この男たち、世界の禁忌タブーをさらりと言い放っていた。互いの魔術科学サイドはお互いの領分を侵さない決まりだというのに。それを超えた男は言う。

「まあ、科学者独特の知識欲といつものかな。……と、そろそろ帰るよ。」

「もうそんな時間か、ゆっくりできねえな、お前は。」「個人的な友人に会うだけだから仕事をずっと休めはしないよ。」

「じゃあな、気をつけて行けよ。」

その言葉は、重い口調だ。あたかも、この時間が密会のようだ。学園都市の飛行機は別格だよ。ちいとばかし速すぎるけどね。そして、男たちはそれぞれの世界に帰る。決して交わることのない二つの世界へ。

そして、物語は始まる。科学と魔術が交わった物語が。

第1章 始まりの休日 break-holiday

某月某日　日本　学園都市　第七学区　男子寮

本日は土曜日、学園都市は休日でそろそろテストの時期かなと、ちよつと危機感を持っている生徒が多数いるこのとき、ちある高校生は家電製品とにらめっこしていた。

「…………消費が速すぎる、つてか小麦粉かさ増し大作戦がやくにたたないじゃねえかああ！」

叫んでいる少年の名は、上条当麻。『ぐぐぐ普通の学園都市の少年である。

よくトラブルに巻き込まれたり、日常的に不幸な目にあつてゐるで普通と言ひ難いのだが……。

そんな上条当麻は家庭の経済事情を回復するため居候の大食いシスターに対抗して、小麦粉による手作りうどん、ピザ、簡単なパン、などの小麦製の料理による大食い対抗策を用意した。

だが、件のシスターさんは量の増えた食事に素早く対応し小麦粉料理とその具材までたいらげ、結局は量の多い食事に期待するようになつてしまつたのだ。

上条当麻の右手には『幻想殺し』という変わったチカラがあるのだが、この事態には全く役に立たないのである。

「…………ふつ、くよくよしたつて始まらねえ。」

半ばあきらめ…………あきらめ状態の調子で発する言葉は、かなり弱弱しかつた。

一方、その原因の居候。真っ白で豪華な（安全ピンがあるため、そう見えづらいが。）修道服を身にまとつた銀髪碧眼の少女、インディックスが申し訳なさそうに言つ。

「『めんね、とうま。やりすぎちやつたかも。……とつまの周りがすく黒く、暗く見えるんだよ。』

インデックスは流石に悪いと思っているのか謝罪を口にしていた。

本人も、当麻が、朝早くにがんばってうどんを作つたりしていたところを見ていたので、少し後ろめたいのだ。

作った本人の苦労が、一瞬（文字どうり）で消し去られてしまったのだから。

最も、散々食べまくつてしまつたにもかかわらず、今ようやくそう思つたわけだが。

上条は普段聞かない謝罪の言葉を聞いて少し氣を許したのか、少しぐ間をおいてこんなことを言つた。

「もういいよ、つてか、せつかくの休日だし買い物ついでに一緒に遊びに行くか？」

「いくいくー。スフィンクスもいつしょにねー。」

パツと負の表情から、天真爛漫な満開の笑顔になつた。当麻はそれを見て、まあ、いいかなとも思つた。

「じゃあ、今日は近所のスーパーじゃなくて大きめのデパートにするか。」

「でぱーと でぱーと」

（インデックスも気分を良くしたことだし、まあ大目に見るか。
……食材の調達は慎重にしないとな。まあ、ちょっとは一緒に楽しんでいくか。）

こうして上条当麻とインデックスは、デパートへ食料調達も兼ねてあそびに出かけたのだった。

窓のないビルその中で巨大なビーカーの中の人間はいた。
男にも女にも大人にも子供にも聖人にも囚人にも見える人間が。
その前に、虚空から人影が二つ現れた。

学園都市のエージェントであり、イギリス清教 必要悪の教会 所属の魔術師である男、土御門元春と学園都市の大能力者であり窓のないビルの案内人『座標移動』結標淡希。

結標は、その能力ですぐにその場からいなくなつた。

残つた土御門は話す。魔術師の顔で。

「何が起こつているか分かつてゐるな。……少しヤバい状態だ、何が起ころか分からぬ。早急に手を打て、アレイスター。」

少し焦り氣味な口調だつた。いつ爆発するか分からぬ爆弾があるかのようだ。

「まあ、いい気分ではないな。ただそこまで焦ることでもなかろう。だが、やつらも手を出しづらい状況をうまく作つたものだな。」

「あれだけ『滞空回線』アンダーラインを、ばら撒いておきながら学園都市内で察知できなかつたのか？」

「やつらは学園都市内ではなく、主に外に出て活動してゐたそうだ。あと今回の件は、『幻想殺し』と『禁書目録』にも協力してもらつ必要があるだろ？。」

「ふん、俺は今から出で、何かが起ころる前に阻止する。ただ、学園都市と同じでイギリス清教も手を出しついて。今回は戦闘ではなく、あくまで調査だからな。だが、」

そこからは、怒りがこもつた感情ものが感じられる。

「これにお前の言つプランが、組み込まれてゐるのならいい加減にしろ。これ以上、表の友人に手を出すな。」

「前に別の男にも似たような事を言われたよ。それに、今回の出来事は計画外だ。私の仕組んだことではない。」

それを聞いても、土御門はどこか納得のいかない表情だつた。

「ああ、今回はそういうことをしておこう。とりあえず俺は出る。異存ないな？」

「構わんよ。私とて、この面倒な状態はさつと抜けたいものだからね。」

そして土御門は行つた、残つたアレイスターは

「計画外ではあるが、プランは短縮できそうだな。」

アレイスターは笑う、男にも女にも大人にも子供にも聖人にも囚人にも見える表情で。

数時間前 英国 聖ジョージ大聖堂

「学園都市へ向かうのですか？」

少女の名は五和、イギリス清教 必要悪の教会 天草式十字淒教所属の魔術師である。

「ええ今は、私はおろかスタイルや建宮も動けません。今回は、調査という形ですから。先ほど土御門にも連絡を入れました。」

答えた女性は、神裂火織。新生天草式十字淒教の女教皇様^{ブリューステス}であり、世界に二十人といない聖人である。その会話の中にはもう一人いる。「今回は、五和に任せることはないのよな。事態が事態だ、あまり周りは騒いでもらっちゃ困るよな。」

その、男の名は建宮斎字。天草式十字淒教の魔術師で、神裂がいなりときは教皇代理。

メンバーのまとめ役も担う男だ。

「あと、五和が向かうのは学園都市じゃなくてその近くの普通の空港。そっちの方が都合がいい、おつと忘れるところだったよな。」

「？」

普通の空港へ向かうことは知っていた二人だが、その次の言葉は聞かされていなかつた。

「五和と一緒に向かうのはもう一人いる。本人の希望もあつてな、イギリス清教ではないが今回は特例だ。」

「誰ですか？」

五和は聞く。かえつて来た言葉は……

「それは、…………なのよな。」

「ええ…………！」「何ですって！！！」

二人の女性は、普段からは想像もできない大声をあげた。
無理もないだろう、その人物は一人も知っている人物だったのだから。

正確には話だけは聞いているが正解だが。

(…………がんばります。)

恋する少女は、ひそかに決意するのだった。

学園都市 第七学区 常磐台中学学生寮前

学園都市の五本指、名門常磐台中学校の学生寮の前に一人の少女がいた。

一人は『空間移動』のチカラを持つ大能力者、一人は『超電磁砲』と呼ばれる超能力者。

普通、寮の前で立ち続けることはないだろう。
なぜ立っているかと言うと、単純に待ち合わせをしているからなのである。

「御坂さーん。」

少女に向けて、甘ったるい声が響く。待ち合わせをしていた友人の声だった。

「あっ、佐天さん 初春さんこつちこつち。」「こちらですよ。」

合流したので早速目的地へ向かう。目的地へは徒歩。ちょっと遠いが歩いていけない距離ではないからだ。

その間、女の子特有の何気ない会話をしながら歩いていく。

「そういえば御坂さん、」

「なに？ 佐天さん。」

「初春から聞きましたよー、ある男子高校生とデートに出かけたとか。さつすが大人ですねー センパイ。」

「で、デートって、た、ただの罰ゲームよ。ほ、ほら大覇星祭の。「そういえばお姉さま、いつたいあの後何をしたんですの。……もしかして、もうあんなことやこんなことも……きいー、あの類人猿がああ。」

「なにもないわよ！ 何であるバカと、そ、そんな状態にならなきやいけないのよ。結局あの後はぐらかされたのよ。くつ、思い出したら腹が立ってきた。今度会つたら覚えてらっしゃいよ、あのクソバカあー。」

「み、御坂さん落ち付いて、そんな強い電撃を人に向けて撃つたら死んじゃいますよー。白井さんも、その怖いオーラを何とかしてください。」

「無理だと思うよ初春。一人とも、もつ何も聞こえてないと思うから…。」

この一人がこんなに取り乱すなんて、いつたいどうゆう人なんだろうと一人は思つたが口に出すと突つ込みが返つてきそうだったのでやめといた。

あまり刺激しない方がいいだろう。

そして、興奮していた二人も落ち着いてきて会話が再開される。

「で、初春にはそういう恋愛じみた話つて聞かないよねー。」

「むう、佐天さんだつてそうじやないですか。人のこと言えません。」

「初春のくせにー、このつ。」

ガバッ、と初春にスカートめぐりをするものの、初春はとつさにガードすることができた。

結果的に太ももまで見えるものだったが。阻止はできた。

「つ、危ない。スカートめぐりはもうやめてくださいよー、

佐天さん。」

「まあまあ、挨拶みたいなもんだし。」

「ハツ、では私もお姉さまにするのも挨拶といつゝことにして……。」

「なるわけないでしょ。」

ズガソッ。

「アオ！」

自業自得である。

（そろそろ何かに田覓めそうだ……。）という心配を御坂はちょっと本気で最近している。

「あ、あの、い、今から向かうデパートって、学園都市の中でもトップ5に入るほど大きいとこみたいですよ。」

「佐天さんは、どこを見てみたいですか？」

「うーん、服だと御坂さん達は無理だし……。御坂さん達はどこがいいですか？」

「私はあそこにある、スポーツセンターがいいかな。お金払つたら遊び放題だし。」

「わたくしは、パジャマや下着などを見て回りたいですね。」

「じゃあ、スポーツセンターの次は昼食、デザートを食べて、デパート内のセブンスミストの支店に向かうということでいいですか。」「なーんか、初春の私情が混じつてたみたいだけどそれでOK。お二人はどうですか？」

「いいわよ。」

「構いませんわ。」

平和な時間超過^こす少女たちは向かう、ショッピングをするためにとある少年も向かう^デパーティーへと。

「着いたー。」

第一声を放つインテックスの横で上条は思つ。

(…………… でけえ……。)

それもそのはず、学園都市の数ある「パートの中でも大きさならば第4位、総売上 第2位、利用客数第1位」という最大級の「パート」なのだから。

「じゃあインテックス、昼飯の前にどこに行きたい?」

「うーん、お昼ごはんの前なら……「ゲームセンター」がいい!」

うーん、と上条は少し考える。ゲームセンターはお金のコントロールがしやすい。

そこでうまくお金を浮かせば、昼食をランチバイキングにして普通に満腹になるまで食べさせるより安く済むようにできるだろ?。考へ終わつた上条は言ひ。

「よし、じゃあやつすつか。というわけで……、勝負といくか? インテックス。」

「のぞむところなんだよ! とうま、絶対負けないんだからねー。」なにをー、と、ちょっとけんか腰氣味ながらでも楽しそうな二人は中に入つて行つた。

その様子を見ている一人の視線にも気付かずには。

第2章 集合する者たち battle_start

「デパートの中にあるものとしては、かなり大きいゲームセンターでインテックスと対戦した上条はほぼ全勝。終盤でやり方を覚えたインテックスに一泡吹かされてしまったわけだが…。」

そして現在、ランチバイキングにて絶賛食事中である。最後に上条に勝つて気分を良くしたのか銀髪シスターの食欲に磨きがかかつている。ランチバイキングなので料理の種類は少ないが、あまり関係がないようである。

「おいしいーおいしいんだよ、とつまーほんとにいろいろでも食べていいの？」

「ああ、ランチバイキングだからな、食べ放題だぞ。」

「とつま、バイキングは日本以外じゃあまり通じないんだよ、もぐ。」

「えっ、そうなの？」

「もぐつ、じつくん…うん、主にビッグフンやビュッフンって呼ばれるの、バツフンっていうのも同じ意味なんだよ。バイキングじゃ海賊になっちゃうんだもん。」

へえー、と素直に感心する上条。英語など、外国語はからつきしなのにもかかわらず頻繁に外国に行っている上条にとつては役に立つ豆情報である。外国についてはあまりいい思い出がないのだが…。

「当麻、この後どこ行くの？ もがふあ。」

「ああ、帰るのにも時間がかかるし、生活用品と食品を買つときたいけどインテックスも必要な物あるか？」

するとインテックスが。

「あ、ああ、確かに買いたいものあるかも…。」

なぜか顔を真っ赤にするインテックス。それに気づかない当麻は。

「ん、まあ、そりやあるよな。じゃ、一緒に買いに行くか。」

「え、あ、うん…、当麻がお金持つてるし…。(ボツ)」

「?じゃあ、食い終わつたら行くから買つものまとめてけよ。」

「うん……。(とつまの鈍感ー)」

「？」

何か違和感を感じた上条だつたが、インデックスの心中などわかるわけもなく店を出る一人なのだつた。

(うーん、なるほどインテックスの様子がおかしかったのはそういうわけね。はいはい。)

現在、上条かいじるはセブンスミスト商店の下着売り場少し離れたベンチである。ここに着いた時、インテックスにお金を求められ、絶対に見ないでと念を押され、そういう上条はインテックスに噛みつかれたくないし、何より自分も下着売り場には入りづらいということもあるのでベンチで座つて待つているわけである。

(うーん、インデックスのやつ大丈夫かな、お金って言つても女物の下着なんて値段知らないし、あの金額で大丈夫なのかな?まあ、買ひすぎはしないだろうけど……。)

女たちの声が聞こえてきた。

「うーいーはーる、アレはどうだつたかな。スーパー・ブラック！」
「むりむりむり、ぜつつつたいむりです！佐天さん、私の年齢を少

「えー、似合ひと思つけどな。」

「私にはまだ早いです。」

「…………へーま、だ、ねー、じゅあこつかは篠くんだ。じゅあ今から床つて買いに行」
一

「やめてください、絶対佐天さんは私に穿かせるつもりですし、も

しごつか穿くにしてもサイズが合わなくなりますよ。

「ちえつ、ばれちゃつたー。」

（なんかすごい話してるな。今の女の子はこんな話までしているのか？）

「つていうか黒子。なんだつたの、あの下着。」

「はあ、私には普通の下着なのですが。お姉さまの下着が子供っぽいのが、そう思つ原因なのではありませんこと。」

「つてそんなの言わなくていいでしょ。大体、黒子に注意される理由なんてないわよ。アンタは、私の保護者じやないんだから。」

「ほ、保護者！お姉さまの保護者！ああ、それも黒子はいいと思いま…」

「それ以上言うな！」

「あううつ…」

「し、白井さん大丈夫ですか？」

「御坂さんも、もうちょっと手加減しなくちゃダメですよ。いくら

白井さんがタフだからって。」

「大丈夫、これくらい日常茶飯事だから。」

（…………不幸だ…………。）

その様子を見ていた上条はまずいと思つた。できれば今すぐ逃げ出したいがこのままダッシュすると言でばれてしまうし、インデックスに、何で置いていったのか説明してほしいかも！ガブツー！ということになりかねない。いろいろ考えて上条は、気配を絶つて立ち上がり自販機の陰に隠れようとグルツと向きを変えて歩きだした、…………が、焦つていたため、自動販売機の陰に隠れていた据え置き型の金属製のゴミ箱に盛大に足をぶつけてしまった。

ガツ！とかなり大きい音を出し、片足でぴょんぴょん飛び回る。

「いつ…………つう……。」

「？何、今の音……つて、アンタ何やつてんの？」

「？御坂さんのお知り合いの方ですか？」

「お姉さま？どうされ……つて、また殿方さんですか？」

「あれ、白井さんもお知り合いですか？私と初春はこの人は知りませんけど…。」

ズンズンと上条に近寄る御坂美琴。それに続く三人。

ものの見事に、見かけてから5秒でばれた上条さんなのだつた。

「…………不幸だ。」

「そーれーはー、私に会ったからなのかあーーこのバカアアーツ。」
ビリビリ、と電撃をわりと本気で撃ってきた。それを、足の痛みに耐えながら何とか右手を出して防ぐことができた。

「人が痛がつているときに電撃を撃ちますか？はい、あなたは鬼ですか？」

「どうせ効かないでしょっが！いつも防いでいるあんたに言われる筋合いないわよ。」

そのやり取りを見ていた三人は、結構なショックを受けていた。佐天と初春は、上条の『幻想殺し』を知らないし、白井にしても御坂がこんな風に電撃を躊躇なく（効かないとはいへ）上条に撃つことまでは知らなかつたのだから。

「えーと、御坂さん。とりあえず落ち着いてください。」

「初春の言う通りです。まず私たちにも状況を説明してください。」

「お姉さま…。いつもこんな感じでこの殿方に電撃をぶち込んでい るんですの？」

御坂が落ち着いたところで、自己紹介である。

「は、初めて。初春飾利です。白井さんとは『風紀委員』の同寮で、御坂さんはお友達です。」

「はじめましてー。佐天凪子でーす。初春とは親友で、そこから御坂さんや白井さんと友達になりました。」

「えーと、上条当麻です。まあ、ただの高校生です。」

「もしかして、噂のあのバカさんって上条さんのことですか？」

「…………御坂。お前そういう風に言つてたのか？」

「なによ、別にいいでしょ。」

いや、結構覚えられ方に問題がある氣がするのですが……。と思つた上条だつたが言うのはやめといた。また怒らせるのはあまり良くないだろう。

「そういえば！あの時御坂さんの電撃を打ち消したのってどんな能力なんですか？レベルはいくつですか？」

「さ、佐天さん失礼ですよ。」

「『無能力者（レベル〇）』だけぢ？」

「――うそあっ――」「――

二人だけでなく白井も驚いていた。能力があるのは知つてゐるが『無能力者』だとは、白井も知らなかつたのだ。チカラ

「アンタの能力、えーと……『幻想殺し』だっけ？何で、『無能力』になつてんのよ？絶対何があるでしょ。」

「『幻想殺し』……ですか？聞いたことない能力ですね。」

そしたらちょっと考えて佐天が。

「あーっ！もしかして、都市伝説の『どんな能力も効かない能力を持つ男』って上条さんのことだつたんですか？……ってあれ？何で御坂さんはそのことを言わなかつたんですか？」

「うっ、……え、えーと……。」

言葉が詰まる御坂。あまり言いたくはないだろう。ずっと追いかけ勝負を仕掛けておきながら、勝てないどころか全戦全敗だなんて。「どうまー。買つてきたよ……つて短髪！！何で短髪がいるの。あと何でこんなに女の子がいるのかな？どうま。」

レジで精算し終わつたインデックスが帰つてきた。御坂にとつてはいいタイミングだが、上条にしてみれば、なんかものすごい霸気を纏つているインデックスにびくびくしているのだ。

「え、えー、偶然出会つただけですし、この三人は御坂の友達みたいだから特に自分は関係ないのですが……。だから、噛みつきは勘弁してほしいのですが……。イ…インデックスサン？」

今にも噛みつきOKですと言わんばかりのこの状態。一刻も早く抜け出したい上条に助け船がやって来た。

「初めまして、インデックスちゃん……でいいのかな？佐天涼子です。」

「初春飾利です。よろしくね、インデックスちゃん。」

「え、あっ、うん、初めまして、インデックスって言つんだよ。正^フ式^{ルネーム}名称は、Index - Librorum - Prohibitor um。でも呼び名は、インデックスがいいかも。」

インデックスは、佐天と初春と自己紹介して落ち着いたようだ、とにかく噛みついてくる心配が無くなつた上条は言う。そろそろ、食料を調達しておかないと帰りに時間がかかるつてインデックスに、おなかすいたーと噛みつかれること請け合いなのだ。

「つと、そろそろ食材を買わねーと。行くぞ、インデックス。じゃあ、また今度。」

「あ、はい。さよなら。」

「また今度。インデックスちゃんもまたねー。」

「あ、うん。バイバイ。つて、待つてよー、とつまー。」

そのまま別れて、その場を離れた一人だった。

そのまま一人と別れ、しばらくすると一気に質問攻めにされた御坂だつた。

「上条さんとはどういった関係なんですかー？そこそこ詳しく。」「佐天さん、ストレートすぎます。もう少し別の言い方があるんじゃないですか？」

「お姉さま、いつたいどんな経緯でお知り合いになられたんですの？そこそこ詳しく述べてお聞かせ願います。」

「え、ちょっと、そんなにいつべんに聞かないでよー。」

顔を真っ赤にして、声を上げる御坂だったがそのあとも質問タイムはたっぷりと続くのであった。

「うーん。本日の夕食は何にしようか？豆腐つてのもありか？」

「ひややっこー、にするのどうま？それも食べてみたいかも。」

現在、デパートの食品売り場で食料調達に来ている一人だったが上条さんちのお財布事情はあまり芳しくなかつた。この状態では、うまく買い物をしないとその後が持たないので。

「豆腐もいいが、大量に買つた方が結果的に安上がりなんだよなー。豆腐の足は早いけど、ちょっとづつ使っていけばいいんだし……。……ちょっとで済めばいいけど。」

「あつ、試食こーなーだ。いつてきまーす。」

「…ほどほどにしろよ。」

正直、試食の食べすぎでブラックリストに載るつてことは避けたい。そんな事を考え、頭をかきながらカートを押して行つた。すると、

バリン、と出入口あたりからガラスが割れる音がしてそのまま上条の頭に何かが飛んできた。

出入口から離れた食品売り場。そこに届くよつた変則の曲つてきた何か。しかし上条が頭をかいていた手は右手。

バギン、と何か異能の力を壊した音がした。

(…何かされた…、いや…、されそだつた。でも何で?)

考えるが、答えは出ない。しかし考へる」とはやめない。最良の選択肢を取るために。

(今回、狙われたのは俺。つてことなら。)

上条は走る。店の外へと向かって。店の中は突然、ガラスが割れた音に困惑している。当然、それが事件性のあるものだとあまり考えてはいけない。

(ここじゃあ、ほかの人が巻き込まれるかもしない。逃げるにしろ、戦うにしろ、ここから離れた方がいい。)

「どうま！」

先ほど行ったはずのインデックスに呼び止められた。

その表情は、いつも見せてている表情ではなく魔術師の表情。かお禁書目録としての表情だった。

「どうまは、またそうやって突っ走つていくんだから。今日こそは私も行くんだよ。」

「ダメだ。いや、インデックスさつきのは魔術か超能力かわかるか？」

「たぶん、超能力で間違いないと思つ。魔術や魔力の痕跡が周りに全く残つてないもん。」

「じゃあ、インデックスはここで待て。俺は、様子を見ながらどうするか判断する。」

だめなんだよ。と言いだししつになつたインデックスだが、突然二人は止められた。

「勝手に、行動しては困りますの。ここは、わたくしの出番ですよ。」

ガラスが割れた場所とは別の出入口近くで立ちふさがつたのは、白井だつた。

「アンタ、またトラブルに巻き込まれているわけ？」

御坂もいた。その後ろには先ほどの一人、初春と佐天が心配な表情

で、また、真剣な表情で立っていた。

「わたくしは、『風紀委員』^{ジャッジメント}です。あなた達のような一般市民を守るための組織です。ですから、大人しくしててほしいんです。」

その眼に映るのは誇り、そして信念。以前の借りを返すといつのも受け取れるだろ？ これを邪魔するのは、あまりにも無粋。

「わかった。御坂、インテックスを頼む。」

「ちょ、アンタはどうすんのよ…」

しかし上条は向かう。出口へと、自分を狙う者のところへと。

「白井、お前に頼みがある。」

「何ですか？」

「俺が囮になる。その間に、上から探し見つけ出してくれ。」

そしてそのまま、白井が止める間もなく行ってしまった。危険が待ち受けるところへ、白井を信用しているからこそとでも言つよう。

「……はあ～。ですからあなたは、怪我が多いんですよ。… 今回はそれをさせないようにするのがわたくしの役目といったところでしょうか。」

一呼吸置いてからその場の仲間たちに言ひ。書類を交わさずとも、

思いは同じだ。

「お姉さまと佐天さんは、その子を見ててくださいな。初春は監視カメラからわたくしをサポート、デパートにパソコンを貸してもらえば問題ないでしょう。いいですね？」

「は、はいっ。」

「ちょ、黒子。わたしが、」

「お姉さま。」

御坂が言つ前に、白井が遮つた。これは自分の出番だとこいつよ。

「これはわたくしの使命です。」

それ以上、御坂は問い合わせることができなかつた。白井が能力をつかい、虚空に消えたからだ。

平和な日常が戦場へと変わる。そして、戦いは始まる。とある者たちの戦いが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335ba/>

とある覚悟の魔術結社(マジックキャバル)

2012年1月10日21時51分発行